

中学校におけるインターネットを介したモニタリング活動の実践 思春期女子のインターネット利用の実態と考察

加藤千枝 埼玉大学大学院教育学研究科
堀田香織 埼玉大学大学教育学部教育心理カウンセリング講座

キーワード: 中学校、インターネット、モニタリング、プロフ、ゲームSNSサイト

1. 目的

近年、青少年は携帯電話やパソコン、ゲーム機等からインターネットに接続し(伊藤, 2010) 情報を得たり、また、自らネット上に情報を発信したりして、他者との交流を頻繁に行っている(Benesse, 2009)。とりわけ青少年の携帯電話からのインターネット利用が問題視されている現状を踏まえ(下田, 2004)、埼玉県教育委員会(2009)は、県内の中学生13,605名、高校生5724名に対し、インターネット利用に関する質問紙調査を行った。その結果として、埼玉県の中学生で自分専用の携帯電話を所持しているのは64.6%で、高校生になると自分専用の携帯電話を所持しているのは94.1%となり、多くの青少年が自由にインターネットを利用できる環境にあるといえる。

青少年がインターネットを自由に利用できる環境にあることから、様々なネット上の遊び場(加藤, 2009, 2010)が登場し、埼玉県教育委員会(2009)の調査によると、携帯電話やパソコンを使って、見ることのあるサイトとして「プロフ、ブログ、ホームページ」を挙げている中学生は合計で60.9%であった。また、合計79.3%の高校生も「プロフ、ブログ、ホームページ」を携帯電話やパソコンを使って、見ることのあるサイトとして挙げている。埼玉県教育委員会(2009)と同様な結果として、群馬県教育委員会(2010)は小学5年生1013名、中学2年生994名に対し、携帯インターネット利用に関する質問紙調査を行い、「プロ

フ」を「見た」・「利用した」ことのある小学生は11.4%、中学生は36.6%としている。また、群馬県教育委員会(2010)は「ゲームサイト」の利用についても尋ね、小学生の62.9%、中学生の67.3%が「ゲームサイト」を「見た」または「利用した」と回答している。

埼玉県教育委員会(2009)、群馬県教育委員会(2010)の調査より、青少年が頻繁に利用しているサイトの一つとして「プロフ」が挙げられる。「プロフ」について、荻上(2008)は「いくつかの質問項目に答えることで、キャラを自己演出することができる手軽なサイト」とし、加藤(2009, 2010)は、「プロフ」をインターネット上の名刺にたとえ、子どもたちがインターネット上に自分の個人情報を発信していることを指摘した。また、斉藤(2009)は「プロフ」をケータイサイト上のシンプルな個人ホームページとし、女子高校生の半数近くが利用し、友人関係を広げていると述べている。さらに、加納(2008)は「まじめな内容のプロフも多々存在するが、ふざけの度合いが過ぎたプロフも少なくない」とプロフの問題点について言及しており、発信例を取り上げた上で、「プロフ」を構成する三大要素として、「性欲」「金銭欲」「ナルシズム」を挙げている。さらに、「プロフ」遊びの危険性として、「プロフ」にはゲストブック(足跡)という、サイト訪問者が発信者に対してメッセージを残すことができる場所が存在しており、場合によっては子どもを狙う危険人物が、ゲストブック(足跡)を利用して子どもたちに容易に近づくことができ

るリスクがあると指摘されている（下田，2008；加藤，2009，2010）。

また、先行研究より、「プロフ」以外で青少年に頻繁に利用されているサイトとして「ゲームサイト」も挙げられる。加藤（2009，2010）は「（ケータイ）ゲームサイト」を単にゲームするためだけのサイトではなく、多くの場合 SNS 機能が付属しており、サイトの会員同士でやりとりすることができるサイトとしている。数年前まで、「ゲームサイト」に接続できるのは携帯電話限定のものが多かったが、近年ではパソコンからアクセスできるものも増え、また、従来 SNS であったサイトがゲーム機能を付属し始めたことから、「ゲームサイト」と SNS の区別が難しくなっている。そのような現状を踏まえ、本研究では、ゲーム機能と SNS 機能が付属したサイトを「ゲーム SNS サイト」と呼びたい。

これまで述べてきたように、青少年が「プロフ」や「ゲーム SNS サイト」などのネット上の遊び場（サイト）を、インターネット機器を介して利用している実態を受け、青少年のサイト利用を見守る活動も盛んになりつつある。片山（2009，2011）は大人（保護者や教師）が青少年のインターネット利用の実態を知り、見守り、指導するというペアレンタルコントロールの重要性を説いており、NPO 青少年メディア研究協会において、ペアレンタルコントロールの営みを支援するためのシステム「CISS（市民インストラクターサポートシステム）」を立ち上げたとしている。また、同様な研究として、荒川ら（2010）はペアレンタルコントロールのような営みを補助するために、インターネット上に存在する「プロフ」や掲示板、「ゲーム SNS サイト」などを見回り、問題行動を予防するための活動を支援するシステムの提案をしている。さらに、本庄は、ネットを媒介とした「いじめ」を防止するためのシステム（ネットいじめ防止システム）を、青少年のインターネット上の人間関係を手掛かりに、教師支援ツ

ルとして開発している（吉田ら，2010）。何れの研究においても、青少年のインターネットを介した問題発信やトラブルに対し、大人（とりわけ保護者や教師）がどのように対応していくのかを問題としているように思う。

上記のように、青少年のインターネットを介した問題発信やトラブルなどを見守るための研究が進められる中、具体的に、学校と生徒のインターネット上の発信内容に関する情報交換を行い、生徒指導・生徒理解に役立てるといった試みや研究はほとんど見られない。そこで、本研究では、筆者が関東圏内 A 県の公立中学校 2 校（A 校・B 校）の教師と、生徒のインターネット上の発信内容について定期的な情報交換を行い、情報交換より把握できた内容を教師が生徒指導・生徒理解に役立てる、いわゆるモニタリング実践についてまとめる。

2. 実践

筆者は関東圏内 A 県の公立中学校 2 校（A 校・B 校）の教師と、生徒のインターネット上の発信内容について情報交換を行い、生徒指導・生徒理解に役立てるといった実践（モニタリング実践）を行っているが、筆者が 2 校の教師と実践を行うことになった経緯を以下に整理したい。

筆者は 2011 年 3 月末まで NPO 青少年メディア研究協会の企画調査員として、各地の小中学校・高校において、「青少年のインターネット利用の実態」というテーマで講習会活動を行っていた。その中で、A 県の中学校 2 校（A 校・B 校）の教師・保護者に対しても啓発する機会があり、それをきっかけとして両校の教師と度々交流を持つことになった。その理由は、青少年がインターネットを利用する際、大人と同様の判断力、自制力、責任能力が求められる（下田，2008）一方で、中学生の約半数は自分専用のインターネット端末を所持し（Benesse，2009）ネット上の遊びサイトを

利用している実態（埼玉県教育委員会，2009；群馬県教育委員会，2010）を両校の教師が重く受け止め、自校の生徒のインターネット利用の実態を把握する重要性・必要性を感じていたからである。そのため、筆者と両校の教師との話し合いの中で、筆者が両校の生徒の発信内容についての情報提供をし、教師はその情報を生徒指導や生徒理解に生かし、生徒指導に厚みを持たせるための取組み（モニタリング実践）に関する協定書を結ぶこととなった。ちなみに、筆者は2011年3月末でNPO青少年メディア研究協会の企画調査員としての職を辞し、2011年4月からは青少年とインターネットについて考える会という組織を立ち上げたため、A校・B校とは新たにモニタリング実践に関する協定書を結んだ。また、両校の生徒の個人情報を守るため、教師との定期的な情報交換においては、生徒の実名ではなく、仮名で行うことを協定書の中に記した。定期的な情報交換については、A校・B校共に校長、教頭、教務主任、生徒指導担当、学年主任、筆者で2～3か月に一度、年5回程度行い、情報交換の場では、危険度の高い発信をしている2～3名の生徒のインターネット利用状況について筆者が報告する。なお、生徒のインターネット利用状況についての把握は、二週間から三週間に一度、生徒が発信している特定のプロフサイト（以下、Xプロフ）とゲームSNSサイト（以下、YゲームSNS）を対象として、筆者が行い、学校からは筆者の報告に対し、生徒の学校での様子について情報を得ている。本研究では、このような取り組みのうち、筆者と学校のやりとりが生徒指導・生徒理解に有効に生かされた事例について取り上げる。また、本研究においては、守秘義務の観点より、学校及び生徒の個人情報は伏せ、事例の内容を損なわない程度に改変を加えた。なお、論文掲載について、学校の了承は得ている。

A校・B校の概要は表1の通りである。

表1 A校・B校の概要

中学校名	A校	B校
全校生徒数	400名程度	500名程度
学校が置かれている環境	<ul style="list-style-type: none"> ・B校に比べ、交通の便が悪い ・近隣に学校はない ・周囲にショッピング施設等の娯楽施設はない 	<ul style="list-style-type: none"> ・A校に比べ、交通の便が良い ・近隣に他の学校が点在する ・周囲にショッピング施設等の娯楽施設が充実している
生徒のサイト利用傾向 <small>20XX+1年4月時点</small>	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的に、Xプロフの利用が多い ・とりわけ、Xプロフを3年生女子が利用している ・1年生や2年生の女子も、Xプロフを利用し始めている 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的に、XプロフとYゲームSNSの利用が多い ・YゲームSNSを利用しているのは、1年生女子である ・Xプロフを利用しているのは3年生女子が多い
情報交換を始めた時期	20XX年4月	20XX+1年4月

3. 事例

3-1 事例1（A中学校・Aさんを中心とした事例）

(1) 事例の概要

20XX+1年2月、当時A中学校1年生のAさんが学校を無断欠席し、自宅からバスを乗り継いで、Xプロフで知り合った隣町の中学1年生の女子（Bさん）に会いに行った。

(2) モニタリング実践の経過

Aさんは20XX年12月頃からXプロフを利用し始め、当時付き合っていた同じ中学校の男子生徒（2年生）とのツーショットの写真をプロフ上に掲載していた。また、Aさんは自分のプロフから同級生や先輩のプロフへ複数リンクを

貼り、自分の趣味や好きなタイプ・嫌いなタイプの男性や女性、自分の性格などの情報も詳細に発信していた。つまり、Aさんはプロフを利用して間もない頃から、積極的な利用をしていたと言える。そのため、学校との情報交換の際、筆者はAさんのプロフ発信状況について報告をした（20XX年12月）。

2ヵ月後、学校から筆者に連絡があり、Aさんが学校を無断欠席し、Xプロフで知り合ったと思われる人のところへ出かけたという連絡があった（20XX+1年2月）。学校からの連絡を受けた筆者は、Aさんのプロフの内容を確認し、彼女のプロフからリンクが貼られていたリアルより、Aさんが無断欠席をする前夜、隣町の中学1年生の女子生徒Bさんと朝まで長電話をしていた発信を発見した（表2）。ちなみに、リアルとはインターネット上の一口メモ帳のようなもので、出来事や自分の考えなどを手軽に・気軽に発信できるネット上の独白機能である（加藤，2009，2010）。

表2 AさんとBさんのリアルの発信（カッコ内は絵文字。20XX年+1年2月XX日の発信）

Aさんのリアルの発信	Bさんのリアルの発信
	Aと(電話)ちゅ 2/XX 00:05
Bと(電話)ちゅ～ 2/XX 00:24	
二時間(電話)してる 2/XX 01:38	
鼻水やばし 2/XX 02:04	
三時間(電話)してる 2/XX 02:22	
	もぉ3時間以上も (電話)してる 2/XX 02:26
もぉ四時間もしてる なにげに眠く なくなったわ Bと長く(電話) したの初めて～ 2/XX 03:21	眠れない オールしよっかな 2/XX 03:21

	はやく外明るく なんないかなあ 2/XX 03:44
七時間くらい(電話)してた 寝てたりしたけどね 2/XX 06:47	
	外まぢ寒すぎ そろ用意しよッ 2/XX 06:54
親にばれました 携帯没収ですね もぉ最悪です 2/XX 09:59	
親が迎えにきて 学校だって 2/XX 10:17	

(3)事例への対応

Aさんは携帯電話を所持していたので、保護者は彼女の携帯電話に複数回連絡をし、彼女の居場所を把握することができた。保護者はAさんを迎えに行き、その後彼女を学校へ連れていった。学校では教師とAさんの二者面談が行われ、面談後はAさんが落ち着いたところで、再度保護者が迎えに来たので、彼女は自宅へ帰っていった。

一方、筆者はAさんが無断欠席をする前夜、Bさんとリアルでやりとりしていた様子を学校に伝え、Aさんが会いに行ったのはBさんの可能性が高いことを伝えた。

筆者の報告を受けた学校は、Bさんが在籍している学校に連絡をし、Aさんが無断欠席をして、Bさんに会いに行った可能性を伝えた。両校の教師で事実関係を確認した結果、Aさんが会いに行ったのはBさんでほぼ間違いのないことがわかった。

(4)事例後の生徒の様子

・学校での様子

問題発生当日以降から、Aさんは学校に遅刻したり、服装の乱れが目立つようになってきたため、定期的に教師とAさんの二者面談が行われるようになった。また、面談の中で、教師が何度か「無断欠席をして誰に会いに行ったの

か」をAさんに訪ねたが、結局彼女は相手の名前を明かすことはなかったという。教師は「Aさんが会いに行ったのはBさんで間違いのないと思うが、Bさんを庇う為に、AさんはBさんの名前を言わないのであろう」と言っていた。

Aさんが3年生になってからも、教師との面談は継続して行われた。その成果のためか、Aさんの服装の乱れは一時期より目立たなくなり、生活態度も落ち着きを取り戻しつつあるという。ただ、Aさんは携帯電話を常に持っていて、「携帯電話に依存している様子が伺える」と教師は心配していた。

・サイト上における発信の様子

問題発生直後のAさんのプロフ上におけるやりとりの特徴として、同じ学校の生徒との交流が少なくなり、一方で、プロフで知り合ったと思われる他県の中학생や高校生との交流が盛んになった。また、Aさんはプロフで知り合ったと思われる他県の生徒に会いに行ったり、相手が彼女に会いに来たりということを繰り返している様子が発信から伺えた。また、以前付き合いをしていた同じ学校の先輩とは別れ、AさんはA中学校から遠く離れた私立学校に通う暴走族風の男子生徒と、付き合いを始めたことがプロフからわかった。

3年生になってからAさんは、私立学校に通う暴走族風の男子生徒とは別れ、近隣中学の生徒や、同じ学校の生徒とプロフ上で再び交流するようになった。発信内容から判断する限り、Aさんの服装や言動などは落ち着きつつある。

3-2 事例2 (B中学校・CさんとDさんを中心とした事例)

(1)事例の概要

20XX+1年10月、B中学校1年生のCさんが学校での出来事をきっかけとし、YゲームSNSの日記でクラスメイトのDさんを誹謗中傷。Cさんの書き込みに数名の同級生が賛同し、学校での大きなトラブルへと発展した。

(2)モニタリング実践の経過

Cさんは20XX+1年10月頃からYゲームSNSを利用し始め、サイト上に派手な化粧をした写真を掲載していたり、自己紹介欄で「たばこ」「喧嘩上等」といった発信をしていたので、学校との情報交換の際、筆者はCさんのサイトの発信状況について報告をした(20XX+1年10月)。

数日後、筆者にB中学校の教師から連絡があり、Dさんが「サイト上でCさんに誹謗中傷されている」と担任に相談をしてきたとのことであった。連絡を受けた筆者は、Cさんの発信内容を再び確認し、表3の内容がCさんのゲームSNSサイト上の日記で発信されているのを確認した(表3)。また、Dさんへの中傷に関わったのはCさんだけではなく、他4~5名クラスメイトと他クラスの生徒(Eくん)など複数人が関わっていることが明らかとなった。具体的には、サイト上の発信に対して賛同を表す機能(「いいね」ボタン)を用い、複数名の生徒がCさんの発信に賛同し、Dさんへの誹謗中傷に参加したことになる。

トラブル発生当時のCさんとDさんの学校での様子について、教師は「20XX+1年10月、CさんはDさんと教室で揉めたことがあり、その際DさんがCさんに対し『不真面目な奴に嫌がらせをしてやる』と公言した。その数日後、クラスの中で、Cさんの友だちのバックが切られていたり、靴に画鋲が入れられたりする事件があった。Dさんは『自分は関係ない』とCさんに言ったが、信じてもらえなかった」とトラブルの概要を教師に説明したそう。このようなクラスでの出来事がきっかけとなり、CさんはDさんに対する誹謗中傷をサイト上で発信したようである。

表3 CさんのゲームSNSサイトにおける発信(一部内容を省略してある)

	CさんのYゲームSNS日記での発信
10/XX	はいっ!!私札てるよ

18:18	死ねよって思ってる 友達の靴にガビョ 入れたの誰だしっっっ!!? まだやるのかよっ それにさああ 友達のぉ キレガ-まで 取るってどうよおっ!! 好も今日掲示物??があ グシャグシャで破れてた からあかついてえ 捨てたしっっ!! 肝Dかあい ちゃんかもなあ まあ犯人見つけたらあ 真面目にい許さんしい!!
10/XX 19:49	犯人わかったよお!! 1年X組 「D(フルネーム)」 コイツだよっ!!! いっつも本読んでえ 男好きでえ 地味なくせにやってくれん じゃんかあ Eくんサンキューなあ 肝Dさん!! 好のイケに何して くれちゃってるわけえ !?

(3)事例への対応

教師はトラブルに大きく関わったCさん、Dさん各々から話を聞き、その上で各々の保護者にも学校での出来事、サイト上における発信概要を確認してもらった。また、教師はDさんに対する中傷の日記を消すよう、サイト利用の危険性について説明した上で、Cさんに指導をした。さらに、全校生徒に対しても、朝礼や集会等でインターネット利用の危険性について説明をした。

(4)事例後の生徒の様子(主にCさん)

・学校での様子

トラブル後、Cさんは速やかにDさんに対する誹謗中傷発信を削除したようだ。その後CさんとDさんの間に大きなトラブルはなく、クラス替えとなった。

2年生になってからのCさんの学校での様子として、服装の乱れが少し目立つが、特に問題なく学校生活を送っているとのこと。ちなみに、友人関係に関するトラブルもないとのことである。教師はCさんについて、「学校では特に問題を起こしたり、トラブルに巻き込まれたりす

ることはないが、サイト上で多くの個人情報発信したり、学校生活に対する不満を発信したりしているため、出来る限り声がけをし、注意深く見守っていきたい」と話していた。

・サイト上での発信の様子

Cさんは2年生になってからもYゲームSNSを利用している。トラブル直後は何度かサイトを削除したり、立ち上げたりを繰り返していたが、2年生になってからはそういった様子も見られなくなった。発信内容については、Dさんに対する中傷等は見られないものの、特定の他者に対して「ババァ」「あの男くそきもい」など攻撃的な発信をしている。また、他の中学校で暴走族に所属していると思われる先輩と付き合いはじめたようで、Cさんはその先輩との写真をサイトに複数枚掲載している。さらに、サイト上では同じ中学校の生徒よりも、他の中学校の生徒とのやりとりが盛んになりつつある。

4. 考察

本研究では、中学校2校(A校・B校)におけるモニタリング実践が、生徒指導・生徒理解に有効であった事例を紹介してきたが、ここでは、本研究における実践及び思春期女子のインターネット利用について考察を行う。

4-1 モニタリング実践における教師の理解の重要性と必要性について

1点目として挙げられるのは、生徒がインターネット上に発信している内容を生徒指導・生徒理解に生かすためには、教師のモニタリング実践に対する理解が不可欠であるという点だ。教師の理解とは、マスメディア等で取り上げられる「青少年のインターネット利用の実態」に関する一般的な理解は勿論のこと、自校の生徒が利用しているネット遊びの実態や、サイトを利用している生徒の性格、友人関係、家庭環境等の理解も含まれると筆者は考える。

例えば、教師が自校の生徒のプロフ発信を発

見したとしても、直ちにそれを生徒に伝え、削除するよう指導するのではなく、生徒が発信しているプロフのリスク（個人情報・危ない出会いに繋がるものなど）を総合的に判断し、リスクが高いと判断した場合には、生徒の性格や友人関係、家庭環境などを考慮した上で、生徒に指導を行う方が望ましい。生徒がインターネット上で問題発信している場合、それを解決するため、ネット上の発信を直ちに削除すれば良いという単純なものではない。問題の根本が友人関係や家庭環境などである場合、教師は生徒がネット上で問題発信をした経緯を理解し、必要に応じて生徒をケアしたり、外部機関の協力を得たりすることも大切となる。

例えば、本研究のA中学校Aさんの事例を振り返ってみる。Aさんの場合、プロフは勿論、リアルも発信しており、比較的リスクの高いサイト発信をしていた。A中学校の教師はそれを把握した上で、Aさんに対し、直ちに発信を削除するよう指導したのではなく、発信内容からわかるAさんの気持ちに寄り添いながら、リスクの低い発信に変わるよう、面談の中でAさんに働きかけていたという。その結果、Aさんが3年生になった頃から、徐々にではあるが、学校での様子や発信内容が良い方向に変化し始めたので、生徒指導・生徒理解の成果があったと思われる。

上記の事例からも、生徒指導・生徒理解は多様で、実に繊細な営みであることがわかる。生徒の問題発信を直ちに削除するよう、厳しく指導するのも生徒指導・生徒理解の一つであるし、生徒がネット上で発信している内容から、生徒自身が抱えている悩みや問題を理解し、解決に導いていくのも、その一つと言えよう。このように多様で、繊細な高度情報化社会における生徒指導・生徒理解をするために、教師は現実世界における生徒の姿は勿論、インターネット上における生徒の姿も理解する必要があると筆者は考える。しかし、教師にとって、現実世界における生徒の姿を理解し、その上でインタ

ーネット上の生徒の姿も理解することは、時間的にも、精神的にも大変苦勞の多いことである。

4-2 教師を支援するサポーターの存在について

1点目の内容を受け、本研究の実践より考察できる2点目の内容は、教師が生徒のインターネット上の姿を理解するにあたり、教師を支援するサポーターの存在が必要だということだ。本研究における事例、先行研究からも明らかのように、インターネット端末を手にした多くの生徒たちは、学校だけではなく、家に帰ってからも学校の友達とネット上でやりとりしたり、新たに趣味のあう友達を作ったりと、大人の知らない世界で多くの時間を過ごしている。インターネット上で多くの人とやりとりすることで、毎日充実した学校生活を送っている生徒もいるだろうが、一方で、ネット上でのやりとりによって、現実世界における自分を見失い、ネット上の世界から抜け出せなくなっている生徒もいる（「ネット依存」）。いわゆる「ネット依存」について、田山（2011）は657名の高校生を対象に携帯電話依存とストレス反応についての質問紙調査を実施した。その結果、高校生の携帯電話依存は、ストレス反応を増悪させることが明らかになった。また、携帯電話依存によって増悪したストレス反応は、携帯電話依存を増強すると田山（2011）は指摘しており、「ネット依存」は深刻な問題の一つと言える。大人たちの知らない世界で、「ネット依存」のような状態に生徒が陥ってしまった際、誰がその生徒の様子や気持ちに気づくことができるのだろうか。やはり、そのような状況に生徒が陥る前、早い段階で大人が生徒の様子に気づくことが必要だと筆者は考える。だからこそ、生徒のインターネット利用の実態を把握し、ネット上における生徒の姿を理解するためにも、サポーターが学校に必要だろう。

本研究においては、筆者が2校の教師のサポーターとして、生徒のインターネット上の発

信内容をモニタリングし、学校に情報提供をした。また、生徒のインターネット上の発信内容には、生徒の本音が書かれていることも多いが、周囲の注目を集めるため、虚偽の発信をしたり、事実を強調した発信がされたりすることもある。そのため、サポーターは現実世界における生徒の姿を理解している教師との情報交換を必ず行い、ネット上の発信について精査する必要があると思われる。また、サポーターにとって、教師との情報交換はサポーター自身のモチベーションアップにもつながる。ゆえに、筆者はサポーターと教師が継続的で良好な関係を築いていくためにも、定期的な情報交換が必須であると考ええる。

4-3 思春期女子のインターネット利用について

以下については、本研究で取り上げた事例の中心人物が共に思春期の女子生徒であったことから、「思春期女子のインターネット利用」について考察を行う。

榎本（2000）は青年期の友人への「欲求の側面」について検討し、その側面が友人への「感情的側面」、友人との「活動的側面」とどのような関連があるのかを検討するため、中学生、高校生、大学生（計 896 名）を対象に質問紙調査を実施した。その結果「欲求の側面」について、榎本（2000）は友人との互いの個性を尊重する関係を望む「相互尊重欲求」、友人と一緒にいたり、遊んだり友人との親しい関係を望む「親和欲求」、友人と同じ行動や同じ趣味を望む「同調欲求」があるとした。そして、「相互尊重欲求」は女子の方が高く、男女とも学校段階と共に高くなる点、「親和欲求」は女子の方が高く、男女とも学校段階による変化は見られなかった点、「同調欲求」は中学のみ女子の方が高く、男女が学校段階と共に高くなる点を指摘した。また、欲求の得点は全体的に女子の方が男子より高く、女子の方が友人に求める気持ちが強いことが示された。さらに、女子

の方が友人に求める気持ちが強かったのは、共有、協調の関係の中で互いに求めるものが強くなる女子の特徴であるとしていた。

同様な研究として、保坂ら（1986）は小中高生の友達関係発達について 外面的な同一行動による一体感を特徴とする gang-group、内面的な互いの類似性の確認による一体感を特徴とする chum-group、内面的にも外面的にも互いに自立した個人としての違いを認め合う共存状態の peer-group といった 3 段階の位相を提示している。

以上の先行研究を関連させながら考察すると、榎本（2000）の指摘する学年段階と共に高くなる「相互尊重欲求」は保坂ら（1986）の指摘する peer-group の形成を促し、男子よりも女子の方が高い「親和欲求」や中学生のみ女子の方が高い「同調欲求」は、とりわけ女子の chum-group の形成を促すと考えられる。つまり、本研究の事例で登場した女子生徒も高い「親和欲求」や「同調欲求」を持っており、自分と同じ考えや趣味を持った友人（chum-group）形成のために、インターネットを積極的に利用していた可能性がある。

思春期女子のインターネット利用については、とりわけ携帯電話のメールに関するものが先行研究では多い。例えば、隅田ら（2009）は首都圏都市部の女子中学生 330 名を対象に、思春期女子グループの友人関係と携帯メール使用について質問紙調査を行った。その中で、隅田ら（2009）は閉鎖的な中で友人とやりとりするメールは、親密確認行為のひとつであり、実際の対面場面における親密確認行動の機会を強化するものと考察している。

また、木内ら（2008）は、高校 3 年生男女 199 名を分析対象とし、高校生の携帯電話の通話およびメールの利用が青少年の対人関係の親密性に及ぼし得る影響と、その影響過程における媒介要因としての自己開示の役割を検討した。その中で、携帯電話のメールの使用が多いほどネットでの自己開示、対面上の自己開示が多く

なり、親密性が高まる、あるいは、ネットでの自己開示から直接親密性が高まること、さらに、親密性が高いほど携帯電話のメールをよく使用するようになる、という循環モデルの適合がもっともよいことが示唆されたとしている。

上記の先行研究から、インターネット端末としての携帯電話のメールを使用することにより、榎本(2000)が指摘する青年期の友人への「親和欲求」や「同調欲求」を満たすことができ、欲求を満たすだけでなく、さらに携帯電話のメールでのやりとりや現実世界でのやりとりも盛んになることが示されたといえよう。このようなやりとりを通じて、思春期女子にとって理想的な chum-group を形成することができると考えられる。

以上のことから、携帯電話から利用できるプロフィールやゲーム SNS サイトでのやりとりも、携帯電話のメール同様、思春期女子の「親和欲求」や「同調欲求」を満たすための chum-group の形成を促し、サイト上でのやりとりの機会や現実世界でのやりとりの機会を強化する可能性があると言えるのではないか。

例えば、A 中学校 A さんは自分と同じ考えや趣味を持った友人を形成するために、プロフィール上に自身に関する多くの個人情報に掲載していた。多くの個人情報を自身のサイトに掲載することにより、彼女にとって理想的な chum-group の形成を追い求める中で、A さんは 2 年生になった頃からクラスメイトや学校の生徒とのやりとりよりも、市町村や県を超えて、他中の生徒・若者とネット上や現実世界においてやりとりをするようになった。結果として、他中の生徒や若者からの影響により、A さんの服装や言動も派手になっていった。

また、B 中学校の C さんは、D さんに対する誹謗中傷をゲーム SNS サイトの日記上で発信した。その発信に対して複数の同級生がサイト上の「いいね」ボタンを押し、C さんの発信に対して賛同した。その様子を見ていた D さんは、自分がサイト上だけではなく、学校でも実

際に攻撃される恐れを感じた為、教師に相談した。つまり、D さんは、自分に敵意のある C さんを中心とした同級生が、ゲーム SNS サイト上でのやりとりによって「D さんを攻撃する」という共通の目的を持ち、互いの繋がりを強めた上で、自分に攻撃してくることを直感的に理解したのであろう。

以上のように考えると、プロフィールやゲーム SNS サイト上におけるやりとりも、「親和欲求」や「同調欲求」を満たし、chum-group の形成を促す可能性があると言える。また、サイト上でのやりとりの機会は勿論、現実世界でのやりとりの機会を容易に強化できるとも言えよう。

4-4 思春期女子にとっての大人

次に、思春期女子にとっての大人、思春期前期である中学生にとっての大人という視点から、本研究における事例を考察したい。また、本研究では大人の中でも教師が生徒理解・生徒指導に積極的に携わったため、とりわけ中学生にとっての教師という視点から考察を行う。

井上ら(1981)は思春期・青年期について、「おとなに対する被保護・服従・依存の関係から離脱し、おとなの権威に反抗的・批判的になるのは、青年期のおとなとの関係の基本的な姿である」とし、この発達の方は教師との関係においてもそのままあてはまるとしている。また、井上ら(1981)は「とりわけ教師が生徒に対するとき、親の子に対する関係とは異なる役割の特殊性がある」とし、「第1に教師はもとも生徒を指導する役割と権威を与えられ、その行使を期待されていること」「第2に教師は多数の生徒を対象にして行動する機会が多いため、1人1人の生徒からみたとき教師の行動には問題があるとみなされやすいこと」を挙げている。さらに、中学生が望む理想的な教師像について、「教師には友だちのような親しみやすさに加えて、生徒の気持を理解し相談相手になってくれるような心のつながりが求められている」としている。

以上のことより、教師は厳格な指導を行う役割を期待されている一方で、多くの生徒にとって「理解のある」教師であることが望まれるということだ。先行研究を基に、生徒から見た教師について、A中学校Aさんの事例について検討してみたい。

Aさんは他中のプロフで知り合ったと思われるBさんに会いに行くため、学校を無断欠席した。その後保護者がAさんを迎えに行き、彼女は学校に連れて行かれることになったが、その時の彼女の心境はリアルでも発信されているように「最悪」であった。彼女にとって「最悪」な状況の中、Aさんは学校に着いてから教師と面談をしたのであるが、その際A中学校の教師は「彼女を責めないように気を付けた」と話していた。その理由として、Aさんは無断欠席をしたことで、保護者に怒られながら学校へ連れて来られたのだろうし、教師が一方的に彼女を問い詰めてしまえば、無断欠席をした経緯について、彼女が話をしてくれることは今後なくなると判断した為だという。Aさんと面談した教師は「出来る限り彼女の話の聴くことに徹した」と言っていた。そして、その日から教師とAさんの定期的な面談が始まったそうだ。Aさんのリアルの発信を見る限り、一時期学校を頻繁に休むこともあったが、教師との面談は継続的に行われていたようだ。その結果として、Aさんが3年生になった頃には、彼女の服装も、希薄で頻繁に変化していた交友関係も落ち着きを取り戻し始めた。それはつまり、Aさんが教師との定期的な面談を重ねることにより、教師が彼女にとっての「理解のある」大人の一人となった為、彼女の学校生活が落ち着きを取り戻し始めたのではないだろうか。

B中学校の事例についても、CさんにゲームSNSサイト上で誹謗中傷されたDさんが、その相談を教師にしたことがきっかけで、サイト上におけるトラブルが明らかとなった。Dさんはサイト上で中傷されたことを教師に相談したわけであるが、総理府青少年対策本部（1971）

の「青少年の連帯感などに関する調査」では、悩みや心配ごとの相談相手を複数回答で求めたところ、高校生・大学生共に「友人」という回答が「先生」に比べると圧倒的に多くなっていた。つまり、悩みや心配ごとは「先生」には相談せず、「友人」にする者が多いということだ。また、その傾向は女子に顕著にみられると井上ら（1981）は指摘している。この調査と同様な傾向は、インターネットトラブルの相談相手についても見られ、埼玉県教育委員会（2009）が行った調査でも、「ネットいじめ」により自分が被害者となった場合、中学生・高校生共に親や教師などよりも、「同じ学校の友人」に相談するという回答が多かった。また、伊藤（2010）が行った調査でも、「ネットいじめ」に遭ったときの相談相手として、小学生・中学生共に「仲のよい友達」「クラスメイト」を選ぶ者が多い。つまり、時代や相談内容に関わらず、青少年にとって、何か困ったことがあった際の相談相手は「友人」と言える。しかし一方で、井上ら（1981）が指摘するように、教師には「生徒の気持ちを理解し、相談相手になってくれる」ことが求められており、生徒から相談相手として期待されている部分の大きいのも事実である。本研究の事例におけるDさんも、ネットトラブルから自分を救出してくれることを期待して、教師に相談したのであろう。B中学校の教師は、筆者との情報交換内容を基に、Dさんからの相談への対応と、Cさんをはじめとする複数名の生徒への対応を迅速に行った。結果として、Dさんに対するサイト上の誹謗中傷発信はおさまり、Cさんは速やかにDさんに対する発信を削除した。その後、Cさんのサイト上ではDさんに対する中傷は一切見られなくなったが、Cさんは2年生になってから、日常生活全般に対する不満をサイト上に発信している。そのため、今後、教師はCさんの日常生活に対する不満を理解し、場合によっては彼女の保護者の理解・協力を得ながら、対応することが長期的に求められるであろう。

5. 今後の研究について

本研究では、A 中学校と B 中学校からの理解と協力を得て、インターネットを介したモニタリング活動の実践として2つの事例を挙げ、考察した。事例数としては少ないが、生徒のインターネット上の発信内容を生徒指導・生徒理解に生かすという点では、先行研究にはほとんどない試みであった。今後の研究としては、中学校との実践を通じて、更に多くの事例の分析を行いたいと考えている。また、A 中学校・B 中学校の教師と同様にモニタリング実践の意義について理解・協力をしてくれる学校が増えることを願う。

謝辞

本論文を作成するにあたり、ご協力いただきました NPO 青少年メディア研究協会の皆様にお礼申し上げます。

引用文献

- Benesse 2009 子どもの ICT 利用実態調査
http://benesse.jp/berd/center/open/report/ict_riyou/hon/index.html
- 荒川裕子・中村健二・小柳滋 2010 プロフサイト内の人間関係解析によるネットパトロール支援に関する研究 情報科学技術フォーラム講演論文集 9(4), 517-518
- 伊藤賢一 2010 群馬県小中学生のメディア環境とネットいじめ 平成 21 年度群馬大学地域貢献・社会情報学シンポジウム 情報社会のいじめ問題 解決に向けた地域からのアプローチ , 49-60
- 井上健治・柏木恵子・古沢頼雄 1981 青年心理学 現代に生きる青年像 有斐閣
- 榎本淳子 2000 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究 48(4), 444-453
- 荻上チキ 2008 ネットいじめ ウェブ社会と終わりなき「キャラ戦争」 PHP 新書
- 片山雄介 2009 情報リスク教育の提唱とペアレンタル・コントロール概念の重要性 学習情報研究(209), 46-49
- 片山雄介 2011 「ネットの見守り」活動の内容と意義 ヒューマンインタフェース学会誌 13(2), 77-80
- 加藤千枝 2009 コミュニティ・サイト利用のリスク 学習情報研究, 209, 40-45
- 加藤千枝 2010 コミュニティ・サイト利用のリスク 警察政策学会資料, 59, 359-364
- 加納寛子 2008 ネットジェネレーションの特徴 現代のエスプリ, 492, 131-139 至文堂
- 木内奏・鈴木佳苗・大貫和則 2008 ケータイを用いたコミュニケーションが対人関係の親密性に及ぼす影響：高校生に対する調査 日本教育工学会論文誌, 32(Suppl.), 169-172
- 群馬県教育委員会 2010 平成 22 年度群馬県携帯インターネット実態調査
- 埼玉県教育委員会 2009 ネットいじめ等の予防と対応策の手引, 63-73
- 斉藤環 2009 ケータイ、メール、プロフ 児童心理 63(4), 322-327 金子書房
- 下田博次 2004 ケータイ・リテラシー 子どもたちの携帯電話・インターネットが危ない! NTT 出版
- 下田博次 2008 学校裏サイト 東洋経済新報社
- 隅田真理子・島谷まき子 2009 思春期女子グループの友人関係と携帯メール使用 グループの友人への欲求および対面の友人関係との関連から 昭和女子大学生活心理研究所紀要 11, 37-48
- 総理府青少年対策本部 1971 青少年の連帯感などに関する調査 総理府青少年対策本部
- 田山淳 2011 高校生の携帯電話依存と心理・行動要因との関連について 日本心身医学会 51(3), 245-253
- 保坂亨・岡村達也 1986 キャンパス・エン

カウンター・グループの発達の・治療的意義
の検討, 心理臨床学研究, 4(1), 15-26

吉田俊和・大西彩子・黒川雅幸・三島浩路・本
庄勝・吉田恵子 2010 携帯電話によるネ
ットを媒介とした「いじめ」防止システムの
開発: 中学生・高校生を対象とした実用的な

システムづくり 日本教育心理学会総会発表
論文集 (52), 100-101

(2011年9月30日提出)

(2011年10月21日受理)

Monitoring the Internet Postings of Junior High School Students with the Aim of Improving Student Guidance: Study on Internet Use by Adolescent Girls

KATO, Chie

Graduate School of Education, Saitama University

HOTTA, Kaori

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

In this research, the author monitored the content of Internet postings by students at two public junior high schools, and exchanged information regarding the content of the postings with their teachers on a regular basis. This paper is a report on the practice of monitoring whereby the content obtained from this information exchange was used by teachers for student understanding and student guidance.

Specifically, the paper introduces two students as case studies and presents the case outlines, monitoring process, case intervention, and condition of the students after intervention.

The research indicates four important points for monitoring using Internet postings by junior high school students. The first point is that in implementing monitoring, the teacher must not only know the content of the student's Internet postings, but also have an understanding of the student's family environment and relationships with friends in order to provide guidance. The second point is the need for a supporter who assists the teacher. The supporter is the party who provides the teacher with Internet information that is useful for student guidance and student understanding. After concluding an agreement with the school regarding the handling of personal information, it is essential that the supporter exchanges information with the teacher on a regular basis to carefully examine the information and to maintain good relations with the teacher. Third, from the viewpoint of the psychological development of junior high school girls, the study notes how their Prof(profile site) and exchanges on SNS game sites meet their needs for seeking friendship and conformity, and promote the formation of chum groups. Finally, the study emphasizes that an "attitude of understanding" among adults regarding the Internet behavior of adolescent girls is important for providing guidance.

Key Words: Junior high school, Internet, Monitoring, Prof(profile site), Game SNS site(SNS site with game)